アップ階段ダウン

ケイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アップ階段ダウン

【Ｎコード】
Ｎ５１１５Ｉ

【作者名】
ケイ

【あらすじ】
階段を上がると、そこはあの世だった。

階段を上がると、あの世だった。

なぜそんなことがわかったかというと、

「ようこそいらっしゃいましたー、ここはあの世でございますあす」

白っぽい服を着た無表情な女性が現れてそう迎えてくれたからだ。きりっとした顔立ちの美人なのだが、いきなりそんなことを告げられても困る。困るというか、おかしいだろこの状況。

「いやあ、そんなことをいわれても」

「突然の環境の変化にはとまどいがつきものです。どうぞ楽になさって、周りを見て御覧なさい」

そう言われて足元を見ると、汚いコンクリートの階段が白い大理石に変わっていた。

白っぽい靄のような雲のようなものが辺りを覆い、光に満ち溢れ、どこまでも見通せそうで、何も見えない。目に映るのは、ただただ一面の白である。

わたしは新宿の雑居ビルの外階段を上っていたはずだ。こんなに美しい場所は知らない。

「ここは？」

いささか慌てながら問うと、

「だからあの世だっつーてんだろーが。飲み込み悪いなあ」

と返された。このひと言葉が悪い。

「はあ。では、というか、あなたは誰ですか？」

「わたくしは案内人です。この階段の担当でして、ここのところ上ってくる人が引きもきらず、あー疲れたなー休みたいなーと思っていたところ、やっと休息を取れる暇ができ、腰をおろしたとたんにあなたが現れたというわけです。ようこそいらっしゃいました」

まだよく状況は飲み込めないが、まったく歓迎されていないことはよくわかった。

「それは、お邪魔してどうもすみません」

機嫌を損ねないほうがよさそうだったので、とりあえず謝っておくことにした。

「いえいえ、まったくです」

謝罪は無駄な行為だったように思えた。

彼女は相変わらずの無表情で、

「それでは、残りの階段を上がっていただきます。上りきったあたりで、いわゆる天国か地獄か、どっちか適当に行き着きますので、上りながら今生の反省でもしてくださいねー。採点にはそれほど影響しませんが、死ぬほど悔やめば地獄落ちのひとでも天国に行けるかもしれません」

べらべらべらっと捲くし立てた。かと思えば、むっつり口を噤んでわたしにプレッシャーをかけてくる。「余計な質問しないで、とっとと行け」という念がひしひしと伝わってくるが、こんなところで気を使う気はない。

「え、ええと、ということは、わたしは死んだんですか？そんな馬鹿な」

彼女は無表情をくずして、わざわざうんざりした表情を作ってくれた。

「ですからここはあの世ですってばー。あなたが死んだかどうかは、うーん、的確にいうと、半死にくらいですかねー」

「半分死んでる！」

わたしはショックに耐えようと身構えたが、自分が死んでいることに対する衝撃が思ったより少なかったので、自らのオーバーアクションを恥ずかしく思った。が、反省している場合ではないのだ。

「それでは、半分は生きているということになりますよね？今から戻れば生き返ったり」

「あー、それですね。生き返るケースもありますが、たいていはまた上がってこられます。蘇生できる可能性はたいへん低いので、戻っても苦しいだけですよ多分」

「その可能性にわたしは賭けたいっ！」

わたしはそう宣言した。生き返れるなら多少痛くてもかまわない。生きてることは素晴らしいのだ。彼女は露骨に嫌そうなそぶりで手

元の用紙に何か記入を始めた。

「うー、生き返ると皆ここのこと忘れちゃうんだよなー、もう一回説明すんの面倒だなー。でも、まあ、あなたの人生ですから、仕方ない。どうぞお戻りください」

彼女はにっこりと笑ってくれた。笑うと今までの毒舌がさらっと水に流せてしまうほどにうつくしい。

わたしは急に彼女と別れるのが惜しくなった。何しろ、今までの人生で見たこともないほどの美人なのだ。せっかくだからちょっと積極的に出てみようと、彼女の手を握ってこう言った。

「生き返れるのは嬉しいですが、あなたを忘れてしまうなんて、悲しすぎます。あなたのように美しい女性は現世にはいません。また逢うときまで、わたしのことを覚えていてくれますか」

視線に熱い想いをこめながら、じっと見つめるわたしに、彼女はどうでもよさそうに呟いた。

「勘違いされる方がたまにいるんですが、わたくしは男ですよ」

「ええーっ」

わたしは一本背負いされたような衝撃を感じてよろめいた。足が階段を踏み外して彼女……じゃなかった彼が視界から消えていく。

「もうこないでくださいねー」

というやる気のない声が足元のほうから聞こえた。

「おい、意識が戻ったぞ！」

野太い声を耳が拾った。

「大丈夫ですか？あなた、階段から落ちたんですよ。覚えてますか？」

全身が鋭く痛んで身動きもできない。少しずつ首を回して辺りを確認すると、どうやら救急車の中らしい。頼もしい救急隊員の中に、ひとり場違いな柄の悪い男がいた。男はほっとしたように言った。

「おお、良かった良かった。死ぬなら借金返してからにしろよ」

そうだった。すっかり忘れていたが、わたしは借金まみれであった。階段から落ちたのは、返済に猶予を求めようとこの男に会いに行く途中だったのだ。

わたしは朦朧とする頭で、死んだほうが良かったかもしれないと考えた。だが、死ぬのもちょっとなあ、と思う。とりあえず階段は二度と上りたくないような気がした。

生きるのも嫌だが、死ぬのも嫌だなあ。

そんなことを考えて、わたしは絶望のままにまぶたを閉じたのであった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5115i/

アップ階段ダウン

2010年10月22日00時37分発行